

2、ふ化について

従来のふ化場で卵を砂中に埋めるふ化技術の問題点として、次の点があげられる。

- (1) スッポンのふ化には適度の砂中湿度が必要で、過度の湿潤や乾燥にさらすとふ化率が低下するので、ふ化管理にはかなりの経験を要する。
- (2) ふ化日数は産卵時期によって異なり、特に春、秋には長く(約 80 日)ふ化率も低下する。
- (3) 卵の発生状況の把握及び腐敗卵の除去が困難である。
- (4) 害敵の防除対策が必要である。

当試験研究はこれらの問題点を解決するために、安価に自作したふ卵器による大量種苗生産技術の確立を目的として、昭和 47 年度より開始された。

初年度は、スッポン卵のふ化には必ずしも卵を砂中に埋める必要のないことが明らかにされた。

昭和 48 年度は、ふ化適温 33℃でふ化日数 37～48 日、ふ化率 80%以上の結果を得た。ふ卵器内で卵を露出したままふ化させることによって、従来のふ化場におけるふ化技術の問題は全て解決される。露出した卵は、砂中の過剰湿潤の影響をほとんど受けず、常時観察することが可能で、適度の湿度保持及び腐敗卵の除去などが容易になる。また、ふ化率及びふ化日数が周年一定になり、従来の方法では、秋期ふ化稚亀がすぐ冬眠に入るのに比べ、1 カ月以上も早くふ化しその期間摂餌を行なうので、稚亀歩留りの向上が期待できる。

昭和 49 年度は、大量種苗生産技術の確立と実用化を目指し、大型ふ卵器を製作し試験を行なった結果、ふ化率 85.5%で、従来のふ化場におけるふ化率に劣らぬ成績を得た。使用したふ卵器の卵収容能力は 7,500 個で、産卵盛期 7 月の 1 日当り産卵数 150 個程度の養殖場(雌親 150 頭、年間種苗生産 15,000 頭規模と概算)では、1 台のふ卵器で年間通して十分ふ化管理することが可能である。(ふ卵器の構造と使用方法は P、4 図 3)

3、養成について

- (1) 成長 スッポンの成長について、当水試及び地元養殖場の成長測定結果をまとめた。ふ化した稚亀は、体重 1.2～3.0 g、甲長 2.0～3.0 cm の大きさで、ふ化直後より魚肉やウナギ配合飼料などをよく摂餌して成長する。稚亀は約 50 g までは緩慢であるが、50 g 以上になると急速に成長する。